

2018 年 2 月 25 日（日）「異邦人との食事 ～四千人の給食～」

マタイ 15:29-39

29 それから、イエスはそこを去って、ガリラヤ湖の岸を行き、山に登って、そこにすわっておられた。30 すると大ぜいの人の群れが、足のなえた者、手足の不自由な者、盲人、口のきけない者、そのほか多くの人をみもとに連れて来た。そして彼らをイエスの足もとに置いたので、イエスは彼らをいやされた。31 それで群衆は、口のきけない者がものを言い、手足の不自由な者が直り、足のなえた者が歩き、盲人たちが見えるようになるのを見て驚いた。そして彼らはイスラエルの神をあがめた。

32 イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。「かわいそうに、この群衆はもう三日間もわたしといっしょにいて、食べる物を持っていないのです。彼らを空腹のままに帰らせたくありません。途中で動けなくなるといけないから。」33 そこで弟子たちは言った。「このへんぴな所で、こんなに大ぜいの人に、十分食べさせるほどたくさんのパンが、どこから手に入るでしょう。」34 すると、イエスは彼らに言われた。「どれぐらいパンがありますか。」彼らは言った。「七つです。それに、小さい魚が少しあります。」35 すると、イエスは群衆に、地面にすわるように命じられた。36 それから、七つのパンと魚とを取り、感謝をささげてからそれを裂き、弟子たちに与えられた。そして、弟子たちは群衆に配った。37 人々はみな、食べて満腹した。そして、パン切れの余りを取り集めると、七つのかごにいっぱいあった。38 食べた者は、女と子どもを除いて、男四千人であった。39 それから、イエスは群衆を解散させて舟に乗り、マガダン地方に行かれた。

【序論】

恐らく、今日の箇所を読んで、あれ？と疑問を感じられた方は少なくないでしょう。そう、主イエスが大群衆をパンと魚で養う奇跡は、既に一度 14 章で学んだからです。14:13-21 は「五千人の給食」で、どちらかと言えばこっちの方が有名かも知れません。それに対し、今日の「四千人の給食」は内容的に見て非常に似ているため、中には同一の出来事を違う角度から見ているとか、何かの間違いで二度も載せてしまったと言われたりもします。しかしながら、主イエスご自身がこの二つの記事を別物とはっきり言っておられる箇所があるので。

まだわからないのですか、覚えていないのですか。五つのパンを五千人に分けてあげて、なお幾かご集めましたか。また、七つのパンを四千人に分けてあげて、なお幾かご集めましたか。(16:9-10)

ですから、今日の「四千人の給食」は流して読むのではなく、やはり丁寧に学ぶ必要があるでしょう。実際、二つの記事には幾つもの違いがありますし、書かれている文脈も違います。この相違点に目を留めていくと、この箇所には隠されているメッセージが見えてくるのです。

【本論】

文脈では、「スロ・フェニキヤの女の信仰」(15:21-28)に続くものとして、今日の記事は書かれています。主イエスと弟子たちは静養のために異邦人の地に入りました。そこにやって来たカナンの女の心に、主は確かな信仰を見られた。舞台は異邦人の地です。主の恵みは更に拡大し、異邦人の群衆に注がれる。それが今日の記事です。

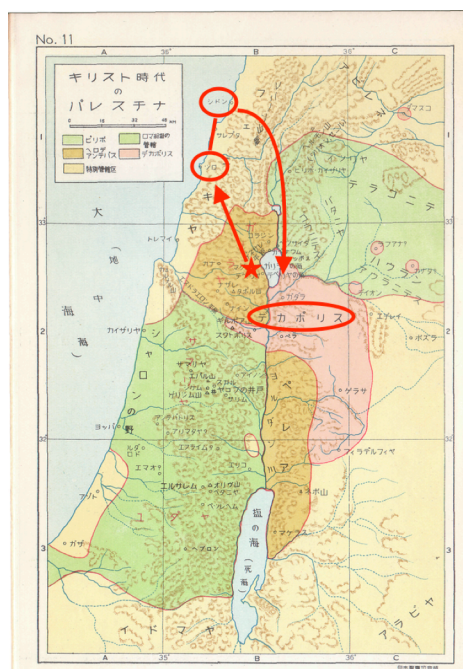
本論 1. イスラエルの神への礼拝

それから、イエスはそこを去って、ガリラヤ湖の岸を行き、山に登って、そこにすわっておられた。(15:29)

サラッと書かれていますが、この異邦人の地の旅はかなり大規模だったと思われます。マルコの並行記事では「それから、イエスはツロの地方を去り、シドンを通して、もう一度、デカポリス地方のあたりのガリラヤ湖に来られた」(7:31)と書かれていて、徒歩で移動したはずですから、時間にして2～3ヶ月を要したことでしょう。デカポリスという地方は、多くの異邦人が住んでいましたが、ユダヤ人も混じっていました。山に登って座る主イエスの姿は、山上の説教を語られた時の様子を思い起こさせます。

すると大ぜいの人の群れが、足のなえた者、手足の不自由な者、盲人、口のきけない者、そのほか多くの人をみもとに連れて来た。そして彼らをイエスの足もとに置いたので、イエスは彼らをいやされた。(15:30)

この地でも主は隠れていることができなかったのですが、そこに連れて来られたのは多くの不具者でした。一つ気になる表現として「置いた」(ῥίπτω)という言葉があるのですが、原語では



「投げやる」といったニュアンスで、どことなく物をドサッと置くようなイメージがあります。人々が病人を厄介者のように見ていた厳しい現実が垣間見られる。しかし、主は彼らをことごとく癒されました。

それで群衆は、口のきけない者がものを言い、手足の不自由な者が直り、足のなえた者が歩き、盲人たちが見えるようになるのを見て驚いた。そして彼らはイスラエルの神をあがめた。(15:31)

「イスラエルの神をあがめた」という表現は、ここに集まった人々が異邦人を中心とする一団であったことを表しているでしょう。異邦人がヤハウェなる神を知り、礼拝するようになった。マタイ福音書の底流にある「異邦人への福音」というテーマがより鮮明になってきています。

本論 2. 異邦人全体に拡大する祝福

イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。「かわいそうに、この群衆はもう三日間もわたしといっしょにいて、食べる物を持っていないのです。彼らを空腹のままに帰させたくありません。途中で動けなくなるといけないから。」(15:32)

三日間も山の上で主イエスと一緒にいたという、驚くべき状況です。まず、この点で「五千人の給食」とは異なる。あの時は群衆が集まったその日の夕方でした。そして、その日のうちに解散させているのです。ところが、ここでは足掛け三日。二晩も共に過ごしていることになります。想像するところ、人々は当初お弁当を持参してきていたのですが、食べ物も底を尽き、あちこちからグーグーとお腹の鳴る音が聞こえてくる。主はそういう彼らを見て「かわいそうに」と、深い憐れみを示されました。ここでも「はらわた」と関係する「σπλαγγνίζομαι」という言葉が使われています。主は異邦人に対してもギョッとほらわたを痛められた。

しばらく前に、息子が「お腹が痛い」と半日ほど訴えた日がありました（本人の許可を得て話しています）。トイレで泣き叫ぶ声がずっと聞こえてきましたが、どうにもしてあげられないもどかしさと共に、本当にかわいそうでした。親として、子どもの苦しむ姿というのは、どうしようもない胸の痛み、ほらわたの痛みを覚えるものです。イエス様の心の一端が分かりますと申しますと生意気ですが、ほんの少し通ずるものがあるのではないのでしょうか。

そこで弟子たちは言った。「このへんぴな所で、こんなに大ぜいの人に、十分食べさせるほどたくさんパンが、どこから手に入るでしょう。」(15:33)

気になるのは弟子たちの態度です。「五千人の給食」の時には、彼らは率先して主に訴

え、食べ物がないから群衆を解散させてほしいと願っています（14:15）。ところが、ここではもう三日目となるのに、群衆の空腹を見ながら何もしていないのです。更に、五千人の養いを既に見てきた彼らが、再び主にパンを増やす奇跡をお願いしないことも理解に苦しむところです。

明確な理由は書かれていませんが、ここでは弟子たちの心の中にある異邦人に対する差別意識が関係している可能性があります。異邦人と一緒に食事することを拒むユダヤ人の意識でしょうか。弟子たちが敢えて親切な態度を見せないところには、そのような理由があるのではないか。

すると、イエスは彼らに言われた。「どれぐらいパンがありますか。」彼らは言った。「七つです。それに、小さい魚が少しあります。」（15:34）

弟子たちの冷淡さとは裏腹に、主は異邦人にも分け隔てなく恵みを注がれる。ここでも「五千人の給食」と異なる点があります。パンの数は「五つ」に対して「七つ」。魚も「二匹」に対して「少し」。よく似てはいるものの、別の出来事であることを示しているでしょう。

すると、イエスは群衆に、地面にすわるように命じられた。それから、七つのパンと魚とを取り、感謝をささげてからそれを裂き、弟子たちに与えられた。そして、弟子たちは群衆に配った。人々はみな、食べて満腹した。そして、パン切れの余りを取り集めると、七つのかごにいっぱいあった。（15:35-37）

ここにも「五千人の給食」との違いがあります。座った場所は「青草」に対して「地面」。パン屑を集めるために用いられた「かご」も、実は言葉が違います。「五千人の給食」の時にはランチバスケット程度の小枝で編んだものが使われましたが（κόφινος）、ここでは人が入れるほどの（使徒 9:25 参照）イグサで編んだ籠が使われました（σπυρίς）。籠の数も「十二」に対して「七」。神の完全性を表すと言われるこの数字は、祝福の世界的な拡がりを暗示していると思われます。

本論 3. 恵みは多くの異邦人に及ぶ

食べた者は、女と子どもを除いて、男四千人であった。（15:38）

最後に、「五千人」に対して「四千人」という数字の違いが出てきます。ここまで見てくると、二つの記事が明らかに別物であることが読者に十分理解できるでしょう。重要なことは、なぜマタイもマルコもこの二つの記事をわざわざ載せたのかということ（ルカ、ヨハネにはない）。両者の順序から言っても、先にユダヤ人に対する恵みがあり、次に異邦人へと拡大されていることが分かる。主イエスの念頭にある「ユダヤ人→

異邦人」という伝道の順序は覆すことができないのです。しかし、そのような中にあって、一つの皮切りとなる事件として、スロ・フェニキヤの女の信仰があった。彼女によって小さな風穴が開けられ、そこから一挙に異邦人への伝道が進んだのです。主がこのことを計画しておられたのかどうかは分かりませんが、何かをきっかけとして伝道の業が新しい地で進み始めるという真理を表しているように思われます。

それから、イエスは群衆を解散させて舟に乗り、マガダン地方に行かれた。(15:39)

「マガダン」という地がどこであるかは分かっていません。初期の写本の中には「マグダラ」となっているものもあり、もしそうだとすると、ガリラヤ湖を渡って西岸へ行ったことになります。因みに、マルコでは「ダルマヌタ」(8:10)となっています。

今日で15章を終えることになりますが、16章からは受難の雰囲気が漂い始めます。ここでガリラヤ伝道は締め括られたと言ってよいでしょう。これまでのマタイ福音書の内容をまとめるならば、主イエスは一貫して「イスラエルの失われた羊」を取り戻すために働いて来られました。ユダヤ人への伝道こそ第一の使命であった。しかし、その中にあって(ユダヤ人の多くが救いを拒む中にあって)、少数の異邦人が反応を見せ始めたのです。それが、ローマの百人隊長であり(8:5-13)、スロ・フェニキヤの女です(15:21-28)。そして、そのような出来事を経て、四千人の給食があり、主の恵みは異邦人にも広く注がれることになった。主イエスがユダヤ人だけの救い主ではなく、全世界の民の救い主であることがここに示されたのです。

私たちはここに、天国の饗宴に多くの人が招かれている様子を思い浮かべたい。そこには、大使徒たちがいるでしょう。そして、遊女・取税人・罪人と呼ばれた人々も招かれているはずです。全世界の中から選ばれた異邦人のクリスチャンも含まれてきます。私たちの名前も「命の書」に記されているという幸いを覚えるのです。

【結論】

私たちに与えられている使命は、天国の饗宴に隣人を招き入れるということではないでしょうか。福音が誰にでも開かれている今、臆することなく宣べ伝えていきたいと思えます。ここからは私の提案になりますが、誰かと食事をする時、その何の変哲もない食卓に主の祝福をもたらしめてみてはどうでしょう。もちろん、押し付けるものではありません。その人の祝福を心から願い、温かな祈りをささげるのです。食前の祈りをささげる時、短くその目的をお伝えできると尚よいでしょう。

主イエスは「四千人の給食」の時でさえ、「これは私のからだである」とは言われませんでした。しかし、確かにその意味を念頭に置いておられました。そして、家長のよ

うに祝福し、感謝をささげました。私たちも、まだ信仰を持っておられない方との食事に「天国の饗宴」の意味を加えることは許されるのではないのでしょうか。そして、共に食事をするとはどういうことなのかをお伝えしていきたいと思うのです。食事とは、平和を表します。信頼関係のあるところにこそ食事は持たれます。その平和の根源とは、神との平和です。主イエスが食事を大切にされたように、私たちも日々の食事、友達との食事に新しい意味を加えていってはいかがでしょうか。

【祈り】

いのちのパンを与え給う主よ。私たちもそのパンによって養われています。私たちの霊も肉も、一切があなたとの交わりを通して支えられています。私たちもこの幸いに多くの人を招き入れたく願います。私たちのすべての食卓を祝福してください。どんな時にも養い主であるあなたを覚えさせてください。私たちが感謝をもって生きている姿こそが証となるのですから。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

40 年に亘ってイスラエルの民をマナで養った如く、今も尚我らの生活を支え給う、父なる神の愛。

ユダヤ人のみならず、異邦人にも等しく憐れみを注ぎ給うた、主イエス・キリストの恵み。

日々の食卓を祝福し、天国の饗宴を思わせ、隣人を招き入れさせ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。